

「人権作文」で篠塚さんが 最優秀賞と優秀賞を受賞

法務省及び全国人権擁護委員連合会では、次代を担う中学生に人権尊重の重要性について理解を深めることを目的に、毎年「全国中学生人権作文コンテスト」を実施しています。

本年度このコンテストに、法務局香取支局管内の中学校10校から840編の作品が寄せられ、審査の結果、神崎中2年生の篠塚夏美さんが最優秀賞、同学年醍醐友紀さんが優良賞に選ばれました。篠塚さんの作品はさらに千葉県大会に推薦され、優秀賞を受賞しました。

入賞を果たした篠塚さんの作文を紹介いたします。



神崎中学校2年生
篠塚 夏美さん

明るい笑顔

私の通う保育園には目の不自由な女の子がいました。いつも先生と一緒に、

いつも先生と遊んでいました。私は、他の子よりも多くその子に話しかけ、遊ぶことができました。

その子は話してみると、とても明るい子で、話をしている間、ずっと笑顔がたえません。その明るい笑顔は、私とその子の目が不自由だということをおぼろげに思い出してしまいました。

遊ぶ時は大体室内で、先生と一緒にしました。遊びといても激しいものではありません。例えば、私がタオルで目を隠します。その子が星の形のスポンジを渡したら、私はその星の形がくりぬかれたスポンジを手さぐりで探しま

す。目隠しをすると、目の前が真っ暗になって何も見えなくなります。その子は、いつもこの闇の中で生活をしているのだと思つくと、とても驚きました。また、私とその子に本を読んだり、その子がいつも思っていることを教えてくれたり、そんな些細なことも、その子と一緒に楽しむことができました。

ある日、私はその子と話をしていただけなのに、「夏美ちゃんは偉い子だね。」と、別の先生から褒められた事がありました。その時は、「その子と話してただけなのにな」と不思議に思っていました。

先生は、「夏美ちゃんと話をすると、その子が元気になるからよ。」と、おつしやいました。「そつなのか!」

と思った私は嬉しくなり、前よりもその子と話すようになりまし。私が話しかけると、その子も嬉しそうに話をしてくれまし。私は、きつとこれからは、きつとそうなんだろうと、思っていました。

小学校に上がり、その子は違う学校に通いまし。月に何度か私達の小学校にお母さんと一緒に遊びにきまし。その頃の私は、その子に話しかけるより、いつもの友達に話しかける方を優先してまし。それに、その子の周りには友達がたくさん集まっています。私の入る隙などなさそうだったので、

学年があがり、その子が学校に遊びに来ることが少なくなりました。ある時、たまたま近くに居る人が少なかったので、話しかけた事がありました。「久しぶり!覚えてる?」

正直、時間がたつてると、声だけで私だと分からないだろう、と思いましたが、「夏美ちゃん!久しぶりだね。」と、その子は言ったのでした。本当にびっくりしまし。仲が良かったと言つても、保育園でしたし、それから何人も声を聞いているはずなのに、私の声で、名前まで思い出せるなんて、

凄く嬉しかったと同時に、直ぐにその子に話しかけることが出来なかつた自分を責めました。「直ぐに話しかけられなくてごめんね。」

気づけば自然と謝罪の言葉が口から零れてまし。その子は以前と同じ、明るい笑顔で言いました。「どうして謝るの?またお話ししよう!」

その時は、その子の心の綺麗さに、言葉の温かさに触れたのでした。今、その子は電車に乗って盲学校まで通学してまし。「毎日通学すること」というのは、その子からすれば大変でもあり、また毎日が発見の日々なんだろうと、私は思います。

障害者や健常者という意識が無いうちに、その子と一緒に遊び、学べたことを私は大切にしたいと思います。障害をもっている人の多くは、自分が特別あつかいされるのが嫌いだと思います。なので、相手が障害者でも、私は普通に接したいと思います。たとえ障害があろうと、彼女は彼女です。何時も自分の意思で何かをやり遂げようとする、笑顔が素敵な、明るくて強い人です。大人になつても、その子は障害者ではなく友達です。私は少しでもその心の支えになりたいです。

彼女は、まだ私の声を覚えてくれてるでしょうか?